

週刊センターニュース No.198



第198号(2008年3月12日)毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

第175回

日時：3月14日(金)13:00~14:30

会場：角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

題目：「FD実践と個別授業の改善」

講演者：佐藤 浩章(愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室)

趣旨：愛媛大学ではマイクロレベル(授業)、ミドルレベル(カリキュラム)、マクロレベル(組織)の3層でFDを進めている。とりわけマイクロレベルでの改善においては、授業コンサルテーションと呼ばれる、コンサルタントによる授業診断・改善案の模索という取組みが特徴的である。その具体的な進め方、有効性と課題について報告する。

佐藤氏は、愛媛大学において授業コンサルティング、カリキュラムコンサルティング、能力開発コンサルティングを含めた総合的な授業コンサルテーションを実践するのみならず、ファカルティ・デベロッパー養成講座等、日本で先例のない様々な取組みを精力的に進めています。授業改善、FDプログラム開発など大学(教員)の教育力向上に関心をお持ちの方、是非ご参加下さい。

第176回

日時：3月18日(火)10:00~11:30

会場：角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

テーマ：「大学・社会生活論(新聞の読み方)の授業内容-授業ビデオによる検討-」

担当者：古畑 徹(共通教育機構長)、西山 宣昭(大学教育開発・支援センター)

趣旨：4月より1年次必須「大学・社会生活論」の授業項目として新たに「新聞の読み方」が加わる。現役の新聞社会部記者を講師に迎え、記事の作成過程について解説し、また記事作成の演習を通して「文章を書く」ことへの動機付けを目的とする。当該新聞社からは、事前に授業の改善点や要望を知らせてもらえればそれに対応したい旨の連絡を受けているので、講師予定者より入手した実際の講義を撮影したビデオに基づき意見交換を行い、改善点、要望などを整理したい。多くの教員の参加をお願いしたい。

第177回

日時：3月18日(火)15:30~17:00

会場：角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

題目：「金沢大学の教育の現状と課題」

講演者：鹿野 勝彦(教育担当理事)、古畑 徹(共通教育機構長)

趣旨：金沢大学の学士課程教育は4月の学域・学類への改組にともない大きく変わろうとしている。その基本的な制度設計はほぼ確定したが、具体的な内容についてはなお多くの課題を残している。この学習会が、それらの課題を確認するとともに、今後の方向性を探るきっかけとなるこ

とを念じている。

第178回

日時：3月19日(水)13:00~14:30

会場：角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

題目：「学生支援と評価」

発表者：青野透、早田幸政、西山宣昭、堀井祐介、渡辺達雄(大学教育開発・支援センター)

趣旨：当センターにおいて平成18、19年度科学研究費補助金に基づき行った基盤研究(C)「大学評価指標における「学生支援」の位置づけに関する実証的研究」(研究代表 青野 透)の最終成果報告を行う。本研究は、すでに認証評価を得た12大学を選定し、訪問聞き取り調査に基づき各大学の学生支援の特色を抽出するとともに、今回の調査結果と公表済みの認証評価結果との比較に基づき認証評価の機能性、有効性を検証しようとするものである。

第6回大学評価研究会のご案内

日時：3月21日(金)10:00~11:30

会場：角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

題目：「大学評価の過去・現在・未来、そして大教センターの今後」

講演者：早田 幸政(大学教育開発・支援センター)

趣旨：大学、とりわけ国立大学を取り巻く環境が厳しさを増しつつある。こうした中で、大学評価がますます重要となってきた。にもかかわらず、大学評価がどの方向に向かうのか未だに不透明な状況にある。大学に確かな教育力が求められていく中で、大教センターの役割も重要性を増しつつある。今回の研究会は、こうした点を中心に報告が行われる。なお、今回の報告者の早田は、他大学に移動のため、本学教員としての研究会報告は、今回が最後になる。

書籍紹介

仲正昌樹『知識だけあるバカになるな！ 何も信じられない世界で生き抜く法』、大和書房、2008年

本学きっての論壇での売れっ子教員(法学部教授)が、大学教育に真正面から向き合った書である。授業一回・考察一回とばかりに、本学の授業を素材に、毎回の授業でこんな学生とこんなふうに応答した、その結果こう考えたという内容である。大学設置基準の文言を借りるまでもなく、今大学に求められているのは、「授業内容の改善」であり、「授業方法の改善」である。それを、組織としての大学に法的責務として課したのが、大学設置基準によるFDの義務づけである。そのための研修・研究を組織として行うために、各大学は費用をかけ、人手をかけることになる。本学でも教育企画会議のもとに、全学FDのための委員会が新たに立ち上がる予定である。

さて、個々の教員が、授業内容・方法の改善に取り組むことは、設置基準改正とは無関係にいつでも行われなければならない。他から言われなくても行うべきだし、実際に多くの教員は行ってきた。その優れた成果が、本書である。

ここで意識されているのは、金沢大学の授業をどう改善するかである。受講生一人ひとりの顔を思い浮かべながら、あるいはその声を頭の中で再生しながら、筆者は書いたに違いない。ジャスト金沢大学サイズの授業改善がこのように著書になることほど、嬉しいことはない。

組織だけが変わっても、授業が変わらなければ、金沢大学の本当の意味の「進化」「変化」は起こらない。また、授業内容が変わらなければ、授業は変わったとは言えない。他大学を含め、多くの大学教員はこのような授業内容改善に密着した書の登場を待っていたはずである。時宜を得た出版である。後は、各教員がこれを読み、自らの授業改善に活かすだけである。

(文責：教育支援システム研究部門 青野 透)